



若年層・教育機関との連携を強化した海洋ごみ削減の取り組み

岐阜県では令和4年度からプラスチックを含む海洋ごみ対策を推進しているが、海が無い内陸県のため県民一人一人が海洋ごみ問題を自分ごととして捉えて行動しようとする社会意識が十分に醸成されておらず、特に市町村では他機関等との連携不足を課題としてあげている。また県民の環境に対する意識調査では「何をどう行動すればよいか分からない」「環境問題の現状が分からない」といった理由が明らかになっている。市町村をはじめ各種団体との連携を強化し、特に小中学生・高校生・大学生、若いファミリー世代などが参加できる企画を増やすことで、若年層の行動変容を促し、海洋ごみの解決に向けた取り組みを積極的に実施した。

2024年度 実施状況について

その他事業：スポGOMI甲子園（10/5実施） スポGOMIワールドカップ（12/7実施）

調査モデル

長良川流域ごみホットスポット調査



- 概要** 現地調査（回収調査）を行い、ごみのカテゴリーとそれぞれの分量を把握する。長良川流域・関市を調査。調査結果はMAPとして可視化する。
- 目的** 河川ごみ散乱状況の実態把握と新たな課題発掘
- アピールポイント** 自治体、地元の環境団体、学生など調査をイベント化して調査を通して河川ごみ、海洋ごみに興味を持ってもらうよう工夫した。
- 効果** 指標とした数字：ごみの回収量
検証方法：ごみのカウント
見られた成果：人的な調査が困難な地点、広域の漂着物の測定が難しいなど新たな課題が発掘された。

行動変容モデル

BBQごみZEROプロジェクト



- 概要** ごみの少ないクリーンなバーベキューを行うためのアイデアコンテスト。
- 目的** 河川敷でのバーベキューやレジャーごみの削減啓発
- アピールポイント** ゲーム感覚で簡単に応募できる簡易なフォームにし、キャンプ場やアウトドア施設に周知協力を依頼（協力店：5店舗）
- 効果** 指標とした数字：応募数、世代
検証方法：応募時のアンケート
見られた成果：アイデア投稿数50
応募世代は20代・30代が多く全国各地から応募があった。気軽に投稿できるスタイルが世代とマッチした

教育連携モデル

GIFFY FOR THE BLUE 2024



- 概要** 伊勢湾河口地点の清掃活動に参加し岐阜県河川敷と比較しながら海洋ごみ対策について考える現地学習。
- 目的** 海や海洋ごみについて知り、学ぶ機会を創出。岐阜県の私たちができることは何かを体験的に考える。
- アピールポイント** 教育委員会とタイアップして特に海や海洋ごみについて関心の高そうなメンバーを推薦等により選定。調査に参加した地元大学生も参加させ、岐阜県との違いを感じ、学習につなげられるメンバー構成とした。
- 効果** 指標とした数字：視聴数
検証方法：YouTube・サイトアクセス数

異分野連携モデル

歴史ファン×海ごみ啓発



- 概要** 歴史関連施設や団体協力のもと歴史ファンを巻き込んだ清掃イベントの実施。
- 目的** 歴史ファンをターゲットに海洋ごみ削減の座組をつくる。
- アピールポイント** 大河ドラマなどで話題となり県内外ともに話題性の高い「関ヶ原・戦国」観光客の増加とともに今後、ごみの増加が懸念されるため啓発を実施。
- 効果** 指標とした数字：参加人数、世代
検証方法：応募時アンケート
見られた成果：イベント実施4回、合計参加数1500人、県外参加約75%、20~30代の参加約40%

海ごみゼロウィーク（清掃活動）



清掃活動参加人数 14,014人 箇所数 15箇所

- アピールポイント** 特に今年度は若い世代との交流を目指し、中学校や高校、大学のメンバーと定期的な清掃活動のよびかけにより、過去数年の中で最も多く清掃活動を実施した。また行政全体の大きなものだけでなく地域清掃や企業コラボなども積極的に行った。

メディア露出



メディア露出本数 12本

- アピールポイント** 岐阜放送での放送のほか、地元のケーブルテレビ局に依頼して実施イベントの取材をしていただけるよう積極的に情報提供を行った。また、放送以外のWEBメディアコンテンツ等への掲載にも力をいれ、キャンプやコンテストWEBメディアに掲載。



2024年度の課題とこれからの展望

岐阜地区に於いては活動が浸透し、特に岐阜市を中心に自治体や教育機関、団体とのネットワーク構築や情報収集が可能となった。しかし、岐阜県全域で考えると、飛騨地方との接点が少なく、飛騨地方の自治体や団体とのネットワークを築き、岐阜県全体で海洋ごみ啓発に取り組むこと。また、県内の漂着ごみの実態を把握し、山から海までを一連で捉えた岐阜県ならではの海洋ごみ削減の学習モデルづくりに取り組んでいくことが今後の課題です。